日本で留学体験作文

ベロヴァ・リュボフ（イタリア、サピエンツァローマ大学）

一年間の日本での留学

私の日本での一年間の留学は予想していたポジティブな視点とネガティブな視点の両方から見てみると、より面白いです。

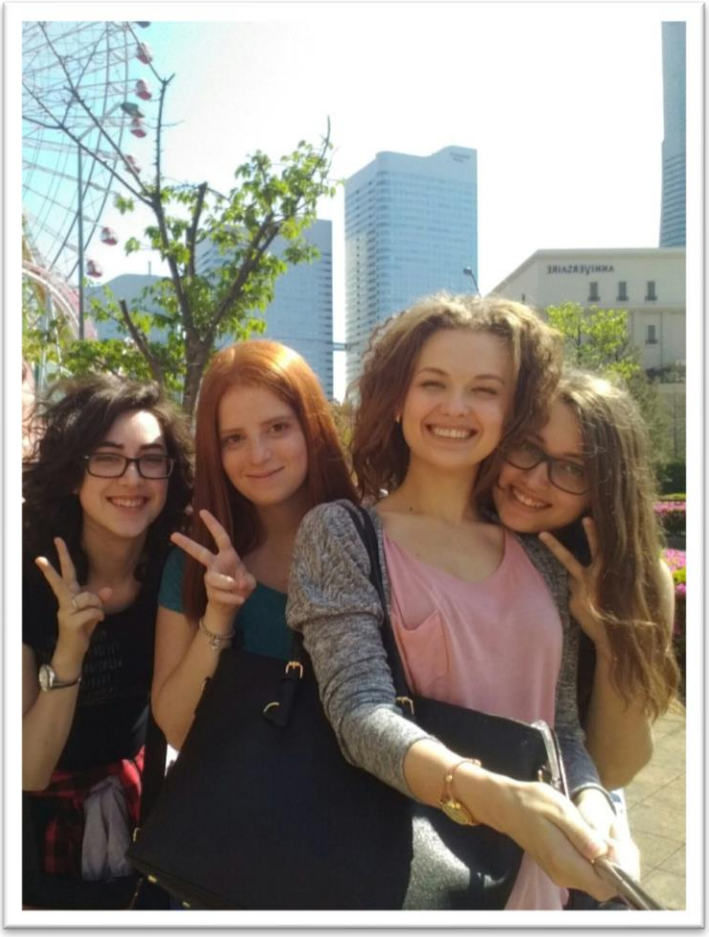
出発の前日から、すでに不安でした。家族や友達と長い間別れて、慣れた日常生活や場所を離れて、まだよく分からない言語を話す国に生活しに行くことがとても怖かったです。

怖い気持ちにもかかわらず、日本に住んだり、勉強したりすることは子供の頃から私の最大の夢でした。そのため、出発の日がどんどん近づいた時は、全てが空想みたいに感じられました。もう一年が経ったのに、まだ今でも「あ、日本にいる」と思うことがあります。最大の夢が現実になる時、こんなことは当たり前かもしれません。

人によって、一年を長いと思うか短いと思うかは異なりますが、私の一年間は最高でした。そして、気づかない間に、日本の生活はやっと私の日常になりました。

一年間で、国籍を問わず、様々な人と出会えて、世の広さと美しさが分かりました。人々の個々の独自性が見えるようになって、出会えた人と話し合うことは教訓になることがわかりました。一年間で、大人として、成長できて、自分に集中することで、自分が愛されていることや自分の時間の大切さを理解できるようになりました。

周りの友達は家族みたいになって、嬉しい時でも苦しい時でもいつもそばにいて、大変だったことを思い出して一緒に笑えるようになりました。



確かに、最初の一か月は一番苦労しました。重要な書類を理解したり、カジュアルな話し方と敬語を使い分けたり、間違えないように電車に乗ったり、スーパーで何が買えるのかを知ったりすることに約2年間の大学の勉強では残念ながら足りません。

しかし、お茶大の授業とサポートしてくださった先生のおかげで、今言ったようなことは何とかできるようになりました。

全ての先生の授業は自分への挑戦として、そして自分の能力を上達させるような刺激として、思っていることを伝えたりすることで、日本語やテーマに対する自分自身の理解を深めました。

そして、着物や浴衣や生け花や書道や茶道などを生きている文化として、試す機会があり、とても嬉しかったです。歌舞伎や能楽公演を鑑賞する機会もあり、深く感謝しています。

時々、私も先生になりました。イタリア語とロシア語と英語を教えながら、私も勉強になったこともあります。全てのことは大切な経験というよりもむしろ、とてもいい思い出になりました。

沢山旅行に行った中で、日本の景色に心を動かされ、興味を抱き、日本の文化や社会をもっと尊重するようになりました。

結論として、留学という体験は、できれば一生で一度はするべきことだと思います。学んでいる言語が気づかない間に上達することのためだけでなく、とりあえず自分の成長のために、自分の視点を広げるために、新しい経験をするために、

新たな自分と出会うために留学をしてみるべきだと思います。